

巡礼者マーク・トウェイン

朝 日 由紀子

I

アメリカは、1620年メイフラワー号で大西洋を渡ってきたピューリタンの分離派の人々によってその歴史が始まり、その始祖たちは、ピリグリム、巡礼者と呼ばれる。中世ヨーロッパにおいては、聖人あるいは聖遺物に対する崇拜から、そして、「免償」を期待して、聖地に旅する者が巡礼者であったが、新天地での「神の国」建設を使命とした信仰者が、アメリカにおける巡礼者であった。その19世紀の子孫たちとともに、アメリカで最初の豪華企画といえる「聖地巡礼の旅」に参加したのが、マーク・トウェインである

マーク・トウェインは、その旅行記 *The Innocents Abroad or the New Pilgrims Progress* (1869年) を出版する際、「はしがき」で作品の意図を明らかにしている。自分よりさきに旅行した者の目を通して、旅行先の国々を見るのではなく、「自分自身の目で」じかに見ることを読者に示唆することを目的としたという。そして、この書は通常の旅行記の作風とは異なる独自性を有しており、「偏見のない目で見てきて」、「少なくとも正直に書いた」ことを確信していると語る。このマーク・トウェインの明確な文学意識を看過すべきではない。「はしがき」は、題名に冠せられた「イノセント」という語が内包する意味を明示しているのみならず、作品に一貫する視点を理解する鍵を説明するものである。

このマーク・トウェインの旅行記は、単なる物見遊山の観光旅行ではない、聖地巡礼を最大の目的としている渡航記であるという性格上、クエーカー・シティ号の巡礼者は、どのように聖地を見ていったか、検討の必要があろう。まず、それに関するトウェインの観察および批評を考察しながら、マーク・トウェインの経験した聖地巡礼はどのようなものであるか見ていく。

時に巡礼者に対して、自分を「罪人」の部類に入れることもあるマーク・トウェインであるが、イスラム教徒やユダヤ教徒に対しては、キリスト教徒としての立場に身をおいて観察、発言していることはまちがいない。そうしたマーク・トウェインが、ヨーロッパおよび聖地を旅するなかでカトリックをめぐるどのような見解の変遷があったか、つぎに検討していく。

II

巡礼者の一行がいよいよマグダラに入った48章に、「はしがき」と同一の表現で巡礼者を批評している箇所があることは注目してよい。巡礼者たちは、ベイルートを発って、タボル、ナザレ、エリコ、エルサレムと、まさしく聖書の世界へ分け入っていくが、それら聖なる土地を見たとき「かれらが言うであろう成句をほぼ言い当てることができる」、とマーク・トウェインはいう。かれらが手引きとしている種本を自分も持っているので、それを口にすればすぐわかると付け加えた後、巡礼者が「自分自身の目で見ないで、それら著者の目で物を見、それら著者の舌で話す」と鋭く指摘する。

聖地巡礼の手引きのなかで、マーク・トウェインが最も多く引用し、槍玉にあげているのが、“Wm. C. Grimes”のガイドブックである。グライズの『パレスチナの遊牧民生活』がパレスチナ旅行記の類の代表的な作品なので、これを批判することはその種の旅行記全体に対する批判とな

るため、この本を取り上げることは、「適切であり、正当である」と50章の最後で述べている。そこでその著者も書名も仮名であると断っているが、「グライムズ」は、William Prime を指していると思われる。「グライムズ」から多く引用する理由を、マーク・トウェインは、同じ50章で、つぎのようについて。「グライムズは、非常にドラマティックであり、また、非常にロマンティックであるから。また、かれは真実を語っているか否かをほとんど気にかけていないように見えるからである。」グライムズの主眼は、読者を怖がらせ、また読者の羨望や賞賛を勝ち得ることにある、とトウェインは見ている。こうした批判的言辞から明白に読み取れることは、マーク・トウェインが、ありのままの真実を語ることを自己の旅行記の最大の使命にしたということであろう。

「創世記」に登場するアブラハム以前の「世界最古の町」ダマスコをはじめて目にしたときの美しい風景を描写する44章で、マーク・トウェインは、それまでの苛酷な旅路の途上で書き留めた言葉をはじめに紹介する。シリアで2番目に大きい泉のほとりで休憩をとるが、“Wretched nest of human vermin about the fountain—rags, dirt, sunken cheeks, pallor of sickness, sores, projecting bones, dull, aching misery in their eyes and ravenous hunger speaking from every eloquent fiber and muscles from head and foot.” (325) と、実写的に飢餓状態にあるキャラヴァンの人々を描いている。このような人々に見つめられて食事をとるとしたらどんなに悲惨かと、嫌悪感をあらわにしているのだが、すぐ続けて、その一団に餓死寸前の1歳から6歳までの幼子が16人もいて、その脚は箒の柄の太さもないと観察しており、トウェインがそこで出会った人々をたんに目にしたくない存在として捉えているのではないことを物語っている。

そして、ダマスコに到着した後、山上から見たダマスコの美しさに感嘆したマーク・トウェインは、“beautiful”を繰り返し強調しながら、つい

には、広大な全宇宙のなかで人間の目が見た最も美しい絵を見ていると思うとまで表現する。実際にダマスコのなかに入ってから、「ユダとアナニア」の家を訪れる場面で、トウエインは、「使徒言行録」8章および9章1節から17節までのサウロ（パウロ）の回心について記述する。なかでも9章3節4節はそのまま引用している。「ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。」そして、まさに自分たち巡礼者が探し当てた家から、パウロは宣教者としての生涯を歩み始めたと説明を加える。マーク・トウエインがこのように直接聖書から引用したのは、エルサレムでは教会迫害者であったサウロが、キリストの召命により福音伝道を開始したダマスコを物語るのに、ルカの記述にまさるものはないと考えたからであろう。

じつは、この旅行記のはじめから聖句をさりげなく自分の文章に織り込んでいたが、マーク・トウエインは、このダマスコ以降の章では、聖書への言及を頻繁に行っている。旧約聖書からは、「創世記」、「ヨシュア記」、「土師記」、「サムエル記上」、「列王記上」、「列王記下」、「イザヤ書」、「ダニエル書」と、聖地との関連で当然のことながら広範囲にわたり、新約聖書からは、「使徒言行録」のほかに、「マタイによる福音書」が圧倒的に多く、「ルカによる福音書」と「ヨハネによる福音書」からも引用されている。

巡礼者たちは、ダマスコを離れ、ヨルダン川の東にあるバシヤンのオークの木立を通り、国境を越え、いよいよ聖地に足を踏み入れる。マーク・トウエインは、「マタイによる福音書」の16章18-19節を引用し、キリストがペテロに仰せられた場所に自分たちが立っていることの不思議さを思う。救世主の足がかつて踏んだ土の上に実際に触れているという感覚と、漠とした神秘的な神性とは、おのずと相容れないと感じる。神が見た同じ

小川や山を見、また、神と面と向かって話すことさえした浅黒い男女たちの子孫にいま囲まれているという現実を受け入れがたい、と率直に語る。それは、トウェインがそれまで神をつねに雲の中にお隠れになっており、はるか遠くにおられる存在であると思っていたためである。日曜学校や教会で教えられる聖なる世界と、現に体験している聖書のなかの世界とは、ひとつであって、ひとつではない。普遍性と歴史性との相反する要素が心のなかで溶け合わないことからくる実感であろう。

ガリラヤの海に向けて、火あぶりのような暑さのなか荒野を進んでいき、木陰がまったくないため休むことのできない状態にあって、「イザヤ書」32章2節の「乾ききった地の大きな岩陰のようになる」という聖句が、聖書のどの箇所よりも美しいものとして引用される。これは、「太陽が水ぶくれを起こさせるほど熱く、草木のまったく生えていないむき出しの土地」(347)を目の当たりにして、マーク・トウェインの心に感動を生む表現となったといえよう。

こうしたなかでベドウィンのアラブ系遊牧民を見かけ、「インクのように黒い髭、背の高い、筋骨逞しい、真っ黒な肌」という特徴をトウェインは描写している。そこで、かつてグライムズのベドウィン人から間一髪で逃れた話をよく読んで、血も凍り安眠できなかったことを思い出す。襲われた事実をいっさい言わずに、1章おきになぜかベドウィン人が近づいてくる設定で、危険をでっち上げ、恐怖心をあおるのが、グライムズのやり方なのである。しかし、現実にはベドウィン人を見ているいま、グライムズのベドウィン人が真実ではなくまやかしであったことが、トウェインには明白となる。

巡礼の一行は、「ヨセフの穴」で足を停める。創世記37章24節に記述されている、ヨセフが兄たちに投げ込まれた穴が、その井戸であるという言い伝えがあるからである。聖書のヨセフ物語をマーク・トウェインは、く

わしく紹介していくことになるが、その点に入る前に、なにより注目したいのは、聖書に関するマーク・トウェインの評価である。“It is hard to make a choice of the most beautiful passage in a book which is so gemmed with beautiful passages as the Bible; …” (353) と美しく表現している。そしてなかでも、ヨセフの精巧な物語にまさるものはそう多くはないであろうと推奨する。その評価の見事な分析において、文学者マーク・トウェインの面目が躍如としている。

Who taught those ancient writers their simplicity of language, their felicity of expression, their pathos, and above all, their faculty of sinking themselves entirely out of sight of the reader and making the narrative stand out alone and seem to tell itself? Shakespeare is always present when one reads his book; Macaulay is present when we follow the march of his stately sentences; but the Old Testament writers are hidden from view. (353)

ヨセフ物語に関して、もう一点マーク・トウェインの独自性が際立つ解釈について指摘したい。前述のように、トウェインは、エジプトに売られたヨセフが「エジプト全国を治める者」にまで上り詰める話をくわしく紹介し、「ヨセフは、旧約聖書のなかの真に偉大な人物である。そして、最も高貴で男らしい。」(354) と評している。だが、それに続けて、「エサウを除いて。なぜ、われわれはその気高いベドウィン人をほめないのでしょうか？」(354) と、世の通念に疑問を投げかけているのである。どうしてだれもかれもが、残酷な兄たちに対して示したヨセフの度量の大きい寛大さを賞賛しなければならないのか。一方、不正を行なった弟ヤコブに、ヨセ

フ以上の崇高な寛大さを示したエサウに対しては、せいぜい気の進まない一片のほめ言葉を投げるだけというのはどうしてであろうか。マーク・トウェインは、創世記27章と33章を引用しつつエサウ物語を構成していく。エサウは、長子としての特権と父イサクから受ける祝福を策略によりヤコブに奪われ、流浪の人となった。それから20年を経て、エサウの復讐を恐れたヤコブは贈り物を用意して再会したとき、エサウは「ヤコブを迎え、抱きしめ、首を抱えて口づけ」したと語られる。トウェインによれば、そのようなエサウの高貴な性格を理解できずに、ヤコブは、なおもエサウを疑い、恐れたのである。マーク・トウェインは、繁栄しているヤコブを許した追放者のエサウと、ぼろをまとって震えている兄たちを許した王座にいるヨセフと、どちらがすぐれた人物であるか、と読者に問うのである。

巡礼者であれば誰もが目指すガリラヤ湖を見たときに、マーク・トウェインは、タホ湖を想起する。タホ湖は、その面積の3分の2がカリフォルニア州、そして3分の1がネバダ州に属している全米で最も美しい湖のひとつである。シエラネバダ山脈の断層盆地にあり、標高1899m、北アメリカで2番目に水深が深い。コバルドブルーの色彩が目には鮮やかなその湖の美しさに感動して、はじめて文学作品に記したのは、マーク・トウェインである。つぎに発表した旅行記 *Roughing It* でも、タホ湖の美しさを描出しているが、ここでも、著者の注として、タホ湖については多くの楽しい思い出をもっているため、引き合いに出すことを断っている。「美しさ」という点で比較した場合、ガリラヤ湖は、タホ湖と比べ物にならず、それは、子午線が虹と比べ物にならないのと同様であるという比喩を用いて説明する。さらに「静寂」という点でも比較していて、タホ湖はそれが魅惑的であるのに対して、ガリラヤの静けさは陰気で不愉快にさせるという。そして、タホ湖がいかにか魅惑的かを一日の時間の経過にそって映し出している。このように自分のよく知っているタホ湖について情景描写をしたの

は、すぐそのあとにかなり長く引用するグライムズの文章を際立たせ、それに下したトウェインの鉄槌の効果を増すためであろう。つぎのようにいう。「グライムズの描写は、欺くための計算がうまくなされている」が、「ペンキとリボンと花をそこから剥ぎ取ったら、骸骨がそこに見えるだろう。」装飾をいっさい剥ぎ取った文章にマーク・トウェインは書き換えているが、それは、現実に見えているままの姿を写し、およそ美しい絵のようにはならないのである。もう一つの例として、『聖地の生活』のC.W.E氏の文章も紹介する。これはさらにひどい例といえよう。「地上の楽園」である所以を描いていきながら、その後で「荒廃と悲惨の場」であるという感想で終わるからである。

こうした二つの例だけでなく、ガリラヤとその湖についてのほとんどの本は、美しい景観であるときまって書く。それは、そう書かなければ不人気になることを恐れるためでもあり、またその著者たちが偽善者であるためとも考えられる。こうした傾向に対して、マーク・トウェインは、つぎのように直言する。「この地域についてなぜ真実を語ってはならないのか。その真実は有害であるのか。… 神が、現在そうであるようにガリラヤ湖とその周辺を創り給うたのである。その神の御業に手を加えることがグライムズの職分なのか。」(368) この言葉は、人間の思いという粉飾を取り除いて、あるがままに偽りなく受容する心を尊重していこうとするマーク・トウェインの究極的な告発となっている。

III

“I have been educated to enmity toward every thing that is Catholic, and sometimes, in consequence of this, I find it much easier to discover Catholic faults than Catholic merits” (435) と、マーク・トウェインは正直に記している。こうしたカトリック観は、プロテスタン

トの国アメリカにおいて、トウェインひとりの問題ではなかった。具体的な例を見てみよう。マーク・トウェインの生まれた年の1835年、アメリカ合衆国長老派教会の総会において、つぎのようなことが宣言された。“the Roman Catholic Church has essentially apostasized from the religion of our Lord and Savior Jesus Christ”¹ という理由から、キリスト教会として認められないことが確認されたのである。トウェインは、幼年時代2年間メソジスト教会に通うが、母ジェーン・クレメンスが1841年2月18日、キリストへの信仰を告白して長老派教会員となったため、それに伴い子どもたちも長老派教会の日曜学校に通うようになった。そのハンニバル長老派教会は、ハンニバルで最初の教会として1839年に建てられた。その牧師をつとめたジョセフ・ベネットに1869年に再会した折、いつもベネット牧師の教会礼拝と日曜学校の両方に出席していた、とマーク・トウェインは回想している。トウェインの通った小学校では、先生は、祈祷と新約聖書の1章を読むことから授業を始めた。また、当時のハンニバルの新聞は、聖書を人生の偉大な教科書として、また知恵の無限の宝庫として、子どもたちが学ぶことを奨励していた。このような南北戦争以前の文化環境のなかで、読書の好きなトウェインは、聖書も熱心に読んだという。このハンニバル時代と聖地旅行の時期に、トウェインが聖書をよく読んでいたことは確かである。

James Wilson は、この作品の時期のマーク・トウェインについて、“The commercial exploitation of religious relics he thinks profound sacrilege, and he seizes the opportunity to lampoon the gullibility of those so desperate for faith that they will accept anything to redeem their own miserable lives.”² と解説しているが、そうした騙されやすい人々を相手に、聖書に関係するありとあらゆる場所を利用するカトリック教会への言及を、作品に即して見ていく必要があるだろう。

アズレス諸島に寄港する6章において、ほぼ200年の歴史をもつイエズス会の聖堂を訪れ、主イエスが架けられた十字架の一片をそこで見つける。「カルヴァリの丘の恐ろしい悲劇が18世紀も前のことではなくて、昨日の出来事のように、その十字架の一片は、すばらしく良い保存状態であった」のに、「この島の信じやすい人々は、まったくなんのためらいもなくそれを信じている。」(43・44) このような島において、イエズス会のペテンが盛んに行なわれていると指摘する。

しかし、なによりもイタリアこそ、カトリックに関するさまざまな観察がなされる場所である。ジェノアでは、マーク・トウェインは、これまでにないほど数多く教会に通ったと語る。この町には、3,400ヤードおきに教会があり、どの通りを歩いても「縁広の帽子をかぶり、長い外衣をまとった、よく太った司祭」を見かける。サン・ロレンゾ聖堂は、有名な建築物であるが、主要な見物は、洗礼者聖ヨハネの礼拝堂に置かれている聖ヨハネの遺骨である。だが、巡礼者たちは、すでにほかの教会でも聖ヨハネの遺骨を見ていたので、2組の遺骨があるとは信じられなかったという。また、聖ルカが描いたという聖母の肖像画を見せられるが、ルーベンスの絵よりも古くは見えなかったことと、ルカが「一度も絵を描いたということ」を文書のなかで触れていない謙虚さに感嘆せざるをえなかった(119)と婉曲的な皮肉を述べた後、聖遺物の件についてまじめに疑問を呈している。前述のイエズス会の聖堂でもそうであったように、古い教会を訪れると、かならず「本物の」十字架の一片と十字架を打ち付けた釘も数本見せられる。だが、こうして見せられる聖遺物を崇拜する気持ちは、アメリカの巡礼者には生まれにくいのである。

同様な文化的違和感は、イタリアの田舎に行ったとき味わう。行く先々で、聖人の絵姿が路傍の十字架か石柱に彫られているのに気付く。なかでも救世主の絵姿は、救世主が十字架にかけられている姿であり、顔は苦悶

でゆがみ、茨の冠の傷や、突き刺された脇から、また鞭打たれたからだから、何本もの血のしたたりが流れている絵で、ぞっとするほど恐ろしい。子どもが見たら、怖がって気を失うだろうとトウェインは心配する。しかも救世主の聖なる頭に本物の茨で作った冠が釘で打ち付けられているのが、トウェインにはグロテスクに思える。

ヴェニスでは、聖マルコ聖堂に行くが、そこでも聖マルコの遺骨が安置されているばかりでなく、マタイ、ルカ、ヨハネの遺骨まで在る。ヴェニス人は、ほかのどこの人間よりも聖人の遺物を崇拝すると、トウェインは説明する。聖マルコはヴェニスの守護神であるが、その由来は、ある聖職者が預言的な夢を見たことによるという。聖マルコの遺骨を手に入れてヴェニスに持ち帰り、保存できれば、ヴェニスは永遠に安泰となるというお告げの夢であった。

ローマで壮大なサン・ピエトロ聖堂を訪れたときも、ペトロの遺骨が地下納骨堂に安置されていて、拝観し、またペトロが囚人となっていた間に兵士を回心させた監獄も見る。修道士は、その監獄の壁の石にペテロの顔型が残されていると説明するが、巡礼者たちには納得のいきかねる事柄であった。

ナザレでは、聖家族が住んでいたとされる場所や受胎告知の場所を見ることが、キリスト教徒にとっては「千金の値打ち」に値するが、どちらも「洞窟」にあるとされている。それにしても、聖家族に関係する重大な出来事が、すべてナザレ、ベツレヘム、エベソのどこでも、「洞窟」で起こっているのは不思議なことであると、トウェインは考える。一方、別な角度から考えてみれば、岩石の洞窟であるからこそ、永久に保存されるという利点があることも確かなのである。このように考えを進めると、「洞窟」は、「すべての人がカトリック教徒に感謝しなければならない詐欺」(381)であるともいえる。カトリック教徒は、神聖な場所を発見すると、直ちに

その場所に教会を建て、遺物を保存することに努める。それに対し、新教徒にそのような任務が与えられていたならば、今日、エルサレムがどこにあるかわからなくなっているであろう、という着想をトウェインは得る。人々に満足を与えるという観点に立つなら、ナザレのどこかわからずにさ迷い歩くより、聖母が洞窟に住んでいると信じた方が、はるかに満たされる生活を送ることができると、トウェインは、より柔軟な思考へ転向していく。アメリカに移住してきた「ピルグリムの思い出は、『プリマス・ロック』がわれわれに残されている限り、消滅することはないであろう」(382)、とマーク・トウェインは文化の継承の必要性について理解を深める。そして、「昔の修道士は賢明である。」(382) という認識にいたるのである。

興味深いことに、カトリック教会に対する見方が変化していくとともに、修道士たちの献身的な奉仕に感動するトウェインの心も語られていく。イタリア滞在中にカトリックの教会や修道士たちのすばらしい働きについて多くの話を聞いて、トウェインは、ただ批判のみではなく、善の面も紹介しなければ公平ではない、と自戒する。

マーク・トウェインにとって感銘深かったのが、ミラノの大聖堂に行き、その地下納骨堂に眠る大司教 St. Charles Bartolomeo の生涯について司祭から聞いたことであった。「貧者を助け、失望している者を励まし、病人を見舞うことに生涯を捧げ、いつでも、どこでも、出会う苦難を軽くした。彼の心、彼の手、そして彼の財布はつねに開いていた。」(127) ミラノを疫病が襲ったとき、やつれた顔の人々の間を穏やかな表情で歩み、すべての人が臆病であったとき、勇敢であり、恐怖から狂気じみた自己保存の本能のままに、あらゆる人間の哀れみの心が破壊されたとき、同情心を湛え、親が子どもを見捨て、友が友を見離したとき、すべての人と共に祈り、手と頭と財布ですべての人を助けた聖なる姿を、マーク・トウェインは、心に描く。

同様に心に残っているのが、ドミニコ会の修道士の、自分の生命を他人に捧げた聖なる姿である。トウェインは、ドミニコ会の修道士について、粗末な重い茶色の外衣を着、はだしで歩き、施し物で生活している人々であると説明する。その前年ナポリでは、コレラの疫病が猛威をふるい、毎日大勢の人が死んでいった。こうした状況のなかで、市民は、利己的な個々の利益を守ることに奔走し、公共の福祉には無関心になっていった。そのなかで、ドミニコ会の修道士たちは、一丸となって病人を看護し、また死者を埋葬していった。修道士たちの気高い献身は、多くの生命を犠牲にすることになったが、みな進んで人々のために自分の生命を捧げたのである。その尊い話を閉じるにあたって、トウェインは、“… but surely the charity, the purity, the unselfishness that are in the hearts of men like these would save their souls though they were bankrupt in the true religion—which is ours.” (187) と、修道士たちの魂の救済への確信を語る。しかしながら、このときトウェインは、カトリックとプロテスタントとの間に一線を画しているといえよう。

そのようなマーク・トウェインであるが、さらに経験を深めることになる。巡礼者たちが必ず歩いて渡りたいと心に決めてきたヨルダン川、そして、死海、さらに灼熱の太陽に焼かれながらマルス・サバへと、一行は向かっていく。そこでは、その厳しい「荒野」でヨハネが説教をしたことが想起される。ようやくマルス・サバが見え、その大きな修道院に泊めてもらう。マルス・サバの住人は、およそ70人で、みな修道者であった。パンと塩以外なにも食べず、水以外なにも飲まない、という徹底した生活を送っていた。

このうちの何人かは、そこに30年以上閉じこもり、その間、「子どもの笑い声も女性の喜ばしい声も聞いたことがなく、また、人間らしい涙も人間らしい微笑も見ていない。人間らしい喜びも、健全な人間らしい悲しみ

も知らないで過ごしてきた。かれらの心には、過去の記憶がなく、頭には、未来への夢もない。」(434) いわば、かれらは「歩く屍」である、とトウエインは断定する。しかしながら、つぎにトウエインが述べているのは、それは第一印象であって、その印象は自然なことと思われるので書き留めておくという弁明である。「かれらはある点で歩く屍である」と繰り返しながら、トウエインは修道士たちの純粋な人間愛を目の当たりにすることで、その見方がまったく変わっていくことを鮮やかに描写する。修道士たちの無私的行為のひとつひとつが、マーク・トウエインの味わった感動を伝える。修道士には、この一行が、外国人であり、新教徒であることがわかっていたにもかかわらず、かれらの大きな隣人愛は、そのような相違を度外視して、ひたすら「飢え、渇き、疲れた人間」とだけ見てくれた点に、トウエインは驚嘆と感謝を覚える。修道院の扉を開いて無条件に受け入れ、いっさいの報酬を期待せず、あらゆる必要を満たすため働いてくれる人がこの世に存在する。修道士たちは、誇り高ぶることなくこれを身をもって示したのである。

翌朝目を覚まして朝食をとったとき、「新しい人間に生まれ変わっていた。」と語る言葉は、たんに元気を取り戻したという意味だけではない、巡礼者マーク・トウエインの心の覚醒を想わせる。“The pauper and the miser are as free as any in the Catholic convents of Palestine.” (435) この一文にマーク・トウエインがカトリック修道院の人間観の本質をどのように捉えたかが凝縮しているといえよう。そして、次のように深い敬意を込めてその計り知れない貢献を称える。新教徒、カトリック教徒を問わず、お金のない巡礼者が、パレスチナを縦横に旅行できるのは、不毛の荒野の只中で、健康によい食事と清潔なベッドをこの修道院に毎夜求めることができるからである。

このように見てきたマーク・トウエインの聖地巡礼の旅は、カトリック

教会に対するそれまでの偏見を解き、マーク・トウェインの心に、聖者の私心のない普遍の愛の姿を焼き付けたと言えよう。

注

本文中の作品の引用は、すべて下記による。

Mark Twain. *The Innocents Abroad or The New Pilgrims Progress*. (A Signet Classic) The New American Library, Inc. 1966.

新共同訳『聖書』日本聖書協会 1987.

1. William E.Phipps. *Mark Twain's Religion*. Mercer U.P, 2003, p.68.
2. James Wilson. "Religious and Esthetic Vision in Mark Twain's Early Career," *Canadian Review of American Studies* (Summer 1986), p.159.

参考文献

Baetzhold, Howard G. and Joseph B. McCullough. *The Bible According to Mark Twain*. University of Georgia Press. 1995.

Bush Jr., Harold K. *Mark Twain and the Spiritual Crisis of His Age*. University of Arizona Press. 2007.

Ensor, Allison. *Mark Twain & The Bible*. University of Kentucky Press. 1969.

Phipps, William E. *Mark Twain's Religion*. Mercer U.P, 2003.

Wilson, James. "Religious and Esthetic Vision in Mark Twain's Early Career," *Canadian Review of American Studies* (Summer 1986).

オーラー・ノルベルト 『巡礼の文化史』（井本响端二・藤代幸一訳）法政大学出版会2004.

ライフェルト, フォルカー 『世界の体験 中世後期における旅と文化的出会い』（井本駒二・鈴木麻衣子訳）法政大学出版会 2005.